The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ブラジルのことばと文化の形成 ： 先住民の役割
Author(s)	鳥居, 玲奈; 平田, 惠津子; Akiti Dezem, Rogério
Citation	外国語教育のフロンティア. 2022, 5, p. 145-157
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/87574
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ブラジルのことばと文化の形成 – 先住民の役割

The Formation of the Brazilian Language and Culture – the Role of indigenous people

鳥居 玲奈・平田 惠津子・AKITI DEZEM, Rogério

Abstract

The purpose of this paper is to clarify how the contact between Portuguese colonists and indigenous peoples during the colonial period in Brazil is reflected in the formation of the modern Brazilian language and culture. In order to achieve a multilayered understanding, we will approach this issue from the fields of linguistics, history and literature. Specifically, we will review the historical processes that led to this contact, understand how the contact between Portuguese and indigenous people has been portrayed in Brazilian literature, and also examine the influence of indigenous languages on the current Brazilian Portuguese language. Through this work, we will highlight the diversity of society, culture, and language in Brazil, a multi-racial and multi-ethnic country.

キーワード：ブラジル、先住民、歴史、文学、言語

1. はじめに

本稿の目的は、ブラジルの植民地時代におけるポルトガル人植民者と先住民との接触が、現代のブラジルのことばや文化のあり方にどのように反映されているか明らかにすることにある。重層的な理解をはかるために、言語学、文学、歴史学の分野からこの問題にアプローチする。具体的には、まず、ポルトガル人と先住民が接触した歴史的背景を概観し、次に、ブラジルの文学作品において、まったく異なる文化を持つ植民者と先住民の接触がどのように描かれてきたかを考察する。最後に、現在、使用されているブラジルのポルトガル語における先住民の言語の影響について検討する。この一連の過程を通して多人種・多民族国家であるブラジルのことば・文化・社会の多様性とその背景にある抑圧の歴史を浮かび上がらせる。

2. 歴史的側面

ポルトガルによるブラジルの本格的な植民地化は1530年代、北東部から始まり、それによって植民者の白人（ポルトガル人）と被植民者の先住民との接触・交流が生まれた。

当初、海岸部で暮らすトゥピー・グアラニー語族は50万人から100万人いたと考えられていて、そのほかの民族は内陸部に広がっていた。先住民は概して半定住生活を送っていて、川の近くで自給用の作物（マニオクなど）を栽培したが、土地がやせてくると移動して別の場所に新たな集落を築いた。彼らは農耕のほかに、狩猟・漁労・採集を行った。冶金術は知らなかったが、多くの民族が製陶の技術を持っていた。生存のための労働は性別に基づいた分業が行われていて、男性は狩猟、漁労、耕地を作るための原野の開墾、住まいの建築と補修などのほかに戦いの準備を担っていて、これは社会文化的観点から名誉ある任務だとみなされていた。女性は育児、料理、種まきと収穫に従事するほか、布を織ったり、生活道具を作ったりした。先住民の信仰はアニミズムで、一連の儀礼が行われ、様々な神話が口承で伝えられた。先住民のあいだに社会階級は存在せず、全員が同じ権利を有し、「カシッキ（族長）」（スペイン人コンキスタドールが使ったアラワク語由来の言葉で、トゥピー語ではmorubixaba、グアラニー語ではmburovixá）に選ばれた人物が秩序の維持、争いごとの仲裁、狩猟の計画、戦いの時期の見極めなどの役割を果たした。

16世紀において、主な先住民の社会的、政治的、文化的構造と生活空間は定まっていたが、ポルトガル人の到着とその結果生じた「カルチャーショック」によって崩壊し始める。経済的搾取の過程で土地は略奪され先住民は捕獲され、暴力や伝染病、強制的なキリスト教化によってその数は激減した。

約200年余りにおよぶ植民地時代（1530年～ 1760年）をとおして、固有の特徴を持つ現地社会が形成されていった。ペルナンブーコ（Pernambuco）のオリンダ（Olinda, 1535年創設）とレシフェ（Recife, 1537年創設）一帯は、当時の首都サルヴァドール（Salvador, 1549年創設）に近接していて、ブラジルの政治経済の中心としていち早く発展した。一方、南部においては、16世紀から18世紀までの間、海岸部のサンヴィセンテ（São Vicente, 1532年創設）、サント・アンドレ・ダ・ボルダ・ド・カンポ（Santo André da Borda do Campo, 1553年創設）およびその近隣地域、そして、サンパウロ（São Paulo, 1554年創設）の3つの集落が形成された。

本格的な植民地化が始まる以前の期間（1500年～ 1530年）、先住民とポルトガル人は比較的穏やかな関係にあり、とりわけブラジルボクの物々交換にしか関心がなかったトゥピー・グララニー語族は植民者に対して友好的であった。しかし、1549年、サルヴァドールに総督府が創設されると、その関係は大きく変化する。数千人のポルトガル人植民者がやって来て、先述した沿岸部にサトウキビ農園を開設すると、砂糖生産の基盤を確立するため、労働力の必要性が益々高まり、先住民は慣れない強制労働を課された。ほとんどの先住民集団がこれに抵抗したため、彼らはポルトガル本国の目に「良き野蛮人」から「矯正できない野蛮人」へと映るようになり、「信仰も、国王も、法も持たない」人々とみなされるようになった。

ポルトガル人植民者の習慣を改め、カトリック教会から「異教徒」とみなされていた先住民をキリスト教化する目的で、イエズス会士は植民地の様々な場所で重要な役割を果たした。特に南部におけるマヌエル・ダ・ノブレガ（Manuel da Nóbrega, 1517-1570）とジョゼ・デ・アンシエッタ（José de Anchieta, 1534-1597）の活動は際立っていた。先住民を改宗させるためには、彼らの言葉を習得することが何よりも重要であった。トゥピー語の辞書や文法書が著されたが、主に口語、つまりイエズス会士の布教活動において、先住民と接触し、意思疎通を図り、教義を伝える手段となる話し言葉の重要度は大きかった。

1549年に最初のイエズス会士が植民地に到着する前から、先住民と親密な関係を築き、沿岸部で暮らしていたポルトガル人の囚人や漂流者がいた。歴史上最もよく知られているのは、サンパウロ村のジョアン・ラマーリョ（João Ramalho, 1493-1580）と、サルヴァドール付近を生活圏とし、トゥピナンバ民族から「カラムル」(“Caramuru,” トゥピー語でウツボ）という愛称で呼ばれていたディオゴ・アルヴァレス・コレイア（Diogo Álvares Correia, 1475?-1557）である。このように、植民地の北東部沿岸と最南端に住む先住民たちと最初に最も円滑に接触したのは、漂流者（後には植民者）であった。この接触は、しばしばcunhatismo（クニャティズモ）と呼ばれる、見知らぬ人を民族集団に取り込む先住民の習慣に基づいて行われ、新来者（来訪者または囚人）に先住民の妻を与えることで（Ribeiro 2014：81)、白人と先住民の混血であるマメルコが生まれた。16世紀末以降、植民者と先住民女性との間の異人種間混淆は、多くの場合、暴力的な捕獲と暴行によって行われた。

1570年以降、ポルトガル王室は先住民に対する暴力や捕獲を抑制し、イエズス会が保護していた先住民の労働力を、利益の大きい奴隷貿易で代替できるようにするため、先住民の奴隷化を禁止した。しかし、トゥピナンバなど人肉食の風習をもつ先住民を奴隷にしたり、「正当な戦争」と名づけられた、敵対する先住民の集落への侵攻の際、捕虜にしたりすることは許されていた。

ポルトガル人植民者と、暴力的な植民地支配に抵抗する先住民との間の衝突について、最初に本国に警告を発したのはイエズス会であった。1540年から1570年までの期間は、バイーア沿岸部とサンヴィセンテのサトウキビ農園（エンジェーニョ）における先住民の奴隷化が頂点に達した時期で、ジョゼ・デ・アンシエッタ神父は「この20年間、つまり1560年から1580年までの間に、8万人以上の土着の民がバイーアの植民者たちの管理の下で死んだ」と訴えている。(Lopez & Mota 2008：74)

北部（現在の北東部）における砂糖経済の発展、バイーアやペルナンブーコへの黒人奴隷貿易の増加、本国の法令と秩序の威力が及ばない距離、17世紀における南部地域の孤立と投資不足は、サンパウロ村とその周辺の住民に比類のない自主性を与えた。それゆえ、豊かな北東部に比べて、これらの地域の発展の速度は遅かった。南部の経済的基盤は多角

農業と、セルタン（Sertão [奥地]）への侵攻による先住民の人身売買であった。リスボンの指示や先住民を保護し、キリスト教化しようとするイエズス会の意図と衝突しながら、ピラチニンガ（Piratininga）の住民はバンデイランテ（奥地遠征隊の隊員）という歴史に残る集団の起源となった。

バンデイラ（奥地遠征隊）とは、16世紀から18世紀にかけて、逃亡奴隷の追跡、先住民の人身売買、キロンボや先住民の集落の破壊などを求めてサンヴィセンテ行政区やサンパウロ村を出発した、一般的に私的な遠征隊で、ポルトガル人とマメルコ（白人と先住民の混血）で構成されていた。スペインとポルトガルの同君連合時代（1580年～ 1640年）には、トルデシーリャス条約（1492年）で定められた境界線が一時的に停止されたため、バンデイラの活動は活発化し、想像上の境界線をはるかに越えて西進した。また、ミナス・ジェライス（Minas Gerais）、ゴイアス（Goiás）、マット・グロッソ（Mato Grosso）など植民地の中央部で宝石や貴金属の探索を行った。

彼らは、歴史上、物議をかもす存在で、先住民に対して過激な暴力を行使したり、多くの場合、すでに改宗した先住民がいる布教村を襲撃したりしたため、植民地内陸部で活動していたイエズス会士たちと対立した。このバンデイランテの植民地内陸部での行動により、サンパウロ村は17世紀の南半球における先住民労働力の売買の中心地のひとつとして知られるようになった。

また、バンデイランテは、奥地へ遠征する際に使用する言語として、リングア・ジェラルを活用した。サンパウロ、ゴイアス、マラニャン（Maranhão）、セアラ（Ceará）、アマゾナス（Amazonas）の内陸部にある多くの川や村、都市の名前はこの言葉に由来する。

サンパウロのリングア・ジェラルは、バンデイラの活動を通じて植民地時代のブラジル南東部と中部に広がり、最初の数世紀間にわたり、イエズス会の宣教師たちによって熱心に研究され、保存された。

しかし、それらの作業は、1758年、ポンバル侯爵（Marquês de Pombal, 1699-1782）が公布した法令で、文明化を前提に植民地で教えたり話したりする唯一の言語としてポルトガル語が強制されがため困難を極めた。

> §６　新しい領土を征服したすべての国家では、征服された人々に自分たちの言語をすぐに導入することは、常に必然的に行われてきた。それが、粗野な人々に野蛮な慣習を捨てさせるための最も有効な手段のひとつであることに議論の余地はなく、また、経験上、彼らを征服した王子の言葉の使用を彼らに導入すると同時に、この王子に対する愛情、崇拝、従順さが彼らに根づくことがわかっていたからである。(Edelweiss 1969：18）

この王室憲章は、ブラジルでのリングア・ジェラル・パウリスタの使用を制限するものであったので、この言葉が消滅していく過程における最初の打撃となった。その1年後、政治的・経済的な理由から、イエズス会士たちをポルトガルの植民地から追放する命令が出された。この命令は、1759年にポンバル侯爵の改革案に基づいてジョゼ1世（D. José I, 1714-1777）が下したもので、植民地でのリングア・ジェラルの使用と保存を直接危うくするものであった。

3. 文学的側面

ポルトガル人がブラジルに到着した1500年にさかのぼり、現在に至るまでのブラジル文学の歴史において、先住民は常に描かれる対象であった。植民地時代初期には、ポルトガルからやって来た航海者や入植者、宣教師たちの書簡や報告書のなかでその外見や性質、習慣が記録され、1822年、ブラジルがポルトガルから政治的独立を果たしてからは、ヨーロッパ系ブラジル人作家たちの詩や小説、戯曲の題材となった。いつの時代においても、また、作品のジャンルに関わらず、先住民は西欧的価値観を持つブラジルの社会的マジョリティによって、しばしば偏見や空想を交えながら、見つめられ、分析され、解釈され、描写されてきたのである。

本稿は、ブラジルの文学作品に描かれてきた先住民のイメージを読み解き、その背景にある民族意識を浮かび上がらせることを目的とする。その方法として、先住民をテーマにした作品を網羅的に紹介するのではなく、作品発表当時から現在まで幅広く多くの読者に読み継がれ、ブラジル人の共通の記憶として残る先住民像を作り上げた作品のなかからひとつ選び、一部、訳出しながら、その内容を検討する。具体的には、19世紀半ば、ブラジルで流行したインディアニズモの代表的な表現者として知られるゴンサルヴェス・ディアス（Gonçalves Dias, 1823-1864）の叙事詩「イ・ジュッカ・ピラーマ（I-Juca-Pirama）」を取り上げる。

まず、インディアニズモについて概説しておこう。インディアニズモは、19世紀半ば、約50年間にわたって展開したブラジルのロマン主義文学の一環として広まった文芸思潮で、この時期、ブラジル民族のルーツとみなされ、理想化された先住民を題材とする数々の小説、戯曲、詩が創作された。そもそも、独立直後、民族意識が高まるなかで生まれたブラジルのロマン主義文学は、とりわけその初期、ナショナリズムと強く結びつき、ヨーロッパに対する自国の優位性を訴えるために、ヨーロッパにはない熱帯の自然を讃え、先住民を美化することによって、ブラジルの神話的過去や民族の誕生を力強く歌い上げた。自然と共存しながら、権力や富とは無縁の世界で生きる純粋無垢な裸の人びと、神秘的な力で民族を導くパジェー（呪術師）、誇り高く勇敢な戦士たちは今も残る先住民のステレオタイプ的イメージだと言えよう。詩の分野では本稿で取り上げるゴンサルヴェス・ディ

アス、小説ではジョゼ・デ・アレンカール（José de Alencar, 1829-1877）がインディアニズモの最も重要な詩人、作家として高く評価されている。

では、ここからインディアニズモの傑作として名高いゴンサルヴェス・ディアスの叙事詩「イ・ジュカ・ピラーマ」のクロース・リーディングを行っていこう。この詩は、1851年に出版された『最後の歌集（*Os últimos cantos*）』に収められており、10の歌章からなる全484行で構成されている。歌章によって詩節の行数や、詩行の音節数が異なり、韻の踏み方も不完全で、変則的な定型詩となっている。これは、18世紀半ば以降、主流であった、理性と合理性を重んじ、「完全な美」を追求する古典主義への反動として、形式的規範を打破しようとしたロマン主義の詩の特徴を表していると言えよう。この詩のタイトルは、ゴンサルヴェス・ディアス自身がつけた注釈（Dias 188）によると、トゥピ語で「殺されるに値する者」という意味で、カニバリズムがテーマとなっている。この詩において、食人の風習は儀式的意味合いをもち、敵の戦士の肉を食すことで、その強さや勇敢さを体内に取り込み、自らのものにすることが前提になっている。

この叙事詩の舞台は植民地時代のブラジルで、数々の戦いによって民族が離散してしまい、疲れ果て、目も見えなくなった老父とふたりで見知らぬ森をさまようトゥピ民族の若い戦士の物語がうたわれている。あるとき、この若い戦士は敵対するティンビラ民族の戦士たちに出くわし、父を森に残したまま、捕らえられてしまう。敵の集落に連れて行かれ、一連の儀式のあと、今まさに食べられるというとき、若者は死の歌をうたって自分の強さを誇示しながら、まもなく命が尽きるであろう年老いた父親のもとへいったん帰してくれと涙を流しながら命乞いをする。森に取り残された父への思いを切々と訴えかける若者の力強く感動的な言葉が第4歌でうたわれているので、この歌章の第1節と第2節、そして、最終節となる第12節を以下に訳出する。

Meu canto de morte, Guerreiros, ouvi: Sou filho das selvas, Nas selvas cresci; Guerreiros, descendo Da tribo tupi.	私の死の歌を 戦士たちよ、聞くがよい： 私は森の息子だ 森で育った 戦士たちよ、私は トゥピの生まれだ。
Da tribo pujante, Que agora anda errante Por fado inconstante, Guerreiros, nasci: Sou bravo, sou forte, sou filho do norte, Meu canto de morte, Guerreiros, ouvi.	移ろいやすい運命によって 今やさまよい歩く たくましき民族のもとに、 戦士たちよ、私は生まれた 私は勇敢だ、私は強い、 私は北部の息子だ、 私の死の歌を 戦士たちよ、聞くがよい。

[…..] Não vil, não ignavo, Mas forte, mas bravo, Serei vosso escravo: Aqui virei ter. Guerreiros, não coro Do pranto que choro; Se a vida deploro, Também sei morrer.	〔中略〕 卑怯でも臆病でもない、 しかし強く、そして勇敢な 私はおまえたちの捕らわれの身となろう ここへ戻ってこよう。 戦士たちよ、私はこうして流す 涙を恥じない もし命を乞うとしたら、 私は死ぬことも厭わない

短い5音節詩行からなる第4歌は軽快で力強いリズムを刻むが、次の第5歌章は10音節詩行へと変化し、一転して重々しい空気を漂わせる。そこでうたわれるのは、トゥピの若者を解放するよう命じるティンビラの族長と、自己弁護しようとするトゥピの若者の間で交わされる会話である。族長は、親を思う若者の気持ちは全く意に介さず、敵の前で涙を流す卑劣な行為を責め、若者を村から追い出してしまう。その緊張感あふれるやり取りの一部を以下に訳出する。

- És livre; parte. - E voltarei. - Debalde. - Sim, voltarei, morto meu pai. - Não voltes! [.....] - Mentiste, que um Tupi não chora nunca, E tu choraste!...parte; não queremos Com carne vil enfraquecer os fortes.	－お前は自由だ、出て行くがよい。 －私は戻ってくる。 －無駄だ。 －いや、戻ってくる、父が死んだなら。 －戻ってくるな！ 〔中略〕 －お前は嘘をついた、トゥピは決して泣かぬと、 だがお前は泣いた！…出て行くがよい、我々は 卑劣な肉で強き者たちを弱らせたくない。

この後、第6歌と第7歌では、敵のティンビラから解放されて父親のもとへ戻った若者が、その様子に異変を感じた父親に問い詰められ、わが身に起きたことを告白する場面が展開する。続く第8歌は8行6詩節で構成されているが、そのすべてが、敵からの辱めをうけて、自分のもとへ帰ってきた息子に対する怒りで身を震わせる父親が、お前はトゥピ民族の誇りを傷つけたと息子を激しく非難する言葉でできている。ここでは、この第8歌の第1節を訳出しよう。

“Tu choraste em presença da morte? Na presença de estranhos choraste? Não descende o cobarde do forte; Pois choraste, meu filho não és! Possas tu, descendente maldito De uma tribo de nobres guerreiros, Implorando cruéis forasteiros, Seres presa de vis Aimorés.	「お前は死を前にして泣いたのか？ 見知らぬ者たちを前にして泣いたのか？ 臆病者は強き者から生まれない。 泣いたのなら、お前は私の息子ではない。 気高き戦士たちの民族の 忌まわしい子孫のお前は、 残忍なよそ者に哀願して 卑劣なアイモレの捕虜になるがよい。

父を思い人前で涙を流したことによって敵のティンビラに拒絶されたばかりか、その父にも面罵された若者が汚名をそそぐにはひとつの道しか残されていない。若者はティンビラの集落に戻り、戦いのおたけびをあげながら敵に切り込んでいく。その勇猛さでティンビラの集落を混乱と恐怖に陥れた若者は、「もう十分だ！気高い戦士よ！おまえは十分に戦った。生贄とするには十分な力だ」という族長の叫び声を聞くと、力尽きて父親の腕に倒れこむ。父親は「これでこそ私の息子だ」と感動の涙を流すというのが第9歌で展開する物語である。

最後の第10歌はエピローグになっていて、幼いころにこの出来事を目撃したティンビラのひとりが、年老いてから、村の子どもたちにトゥピの若い戦士について語り聞かせるという場面で締めくくられる。

最後に訳出するのは、この第10歌の第3節と第4節である。

Um velho Timbira, coberto de glória, Guardou a memória Do moço guerreiro, do velho Tupi! E à noite, nas tabas, se alguém duvidava Do que ele contava, Dizia prudente: -“Meninos, eu vi! Eu vi o brioso no largo terreiro Cantar prisioneiro Seu canto de morte, que nunca esqueci: Valente, como era, chorou sem ter pejo; Parece que o vejo, Que o tenho nest'hora diante de mi. Eu disse comigo: Que infâmia d'escravo! Pois não, era um bravo; Valente e brioso, como ele, não vi! E à fé que vos digo: parece-me encanto Que quem chorou tanto, Tivesse a coragem que tinha o Tupi!”	誇りに満ちたひとりの年老いたティンビラが、 老トゥピの、若き戦士のことを 記憶にとどめていた。 そして夜、集落で、もし誰かが彼の話を 疑おうものなら、 思慮深く言ったものだ：「子供たちよ、わしは見た！ わしは見たのだ、広い大地で 捕虜となった勇者が歌をうたうのを、 自らの死の歌を、わしは決して忘れない。 彼のような勇者が恥じらいもなく泣いたことを、 まさにこの時わしの目の前に その男を見ているようだ。 わしはつぶやいた：何と卑劣な捕虜なのだ！ しかし違った、彼は勇者だった。 彼ほど勇敢で誇り高き者を、わしは見たことがない！ おまえたちに誓って言おう：あのように泣いた者が トゥピの勇敢さを持っているとは すばらしいことに思えると！」

ティンビラの族長も、この年老いたティンビラも、トゥピの若者が涙を流して命乞いするのを見て、心の底から侮蔑したが、その後、若者がとった勇気ある行動に評価を覆し、その気高さや勇敢さを称賛する。たとえ敵であっても、相手の価値を認め、讃えるフェアプレイ精神は、西欧のロマン主義文学で美化された中世の騎士道精神に重なるものだと言えよう。敵対関係にあるふたつの先住民族トゥピとティンビラのいずれをも理想化し、讃えることによって、ゴンサルヴェス・ディアスはブラジル人がこ

れらの「高貴な野蛮人」の血をひく誇るべき民族であることをうたいあげたのである。

最後に、第8歌で、トゥピの戦士の父親が息子を罵倒するとき、「卑劣」で「残忍」な民族のたとえとして挙げているアイモレ民族[2)]に着目すると興味深いことが垣間見えることを指摘しておきたい。アイモレはトゥピ語族とは異なる言語グループに属する先住民族で、16世紀から17世紀にかけて、ポルトガル人の支配に強く反発し、激しい戦いを繰り広げたことで知られる。彼らにとってそれは、自分たちが住む場所や暮らし、そして命を守るための戦いであったが、征服者となったポルトガル人にとっては、野蛮な民族による反逆的な行為に過ぎず、結果として、アイモレは「卑劣」で「残忍」な先住民の代名詞としてヨーロッパ系ブラジル人の記憶に刻まれたのである。このことは、歴史が勝者によって書かれてきたことを現代の読者にあらためて示していると言えよう。

先住民が「文明化」の名のもとに、ヨーロッパ人によって住んでいた土地を奪われ、キリスト教化によって固有の文化を破壊されたことは歴史をひもとくまでもない事実である。ブラジルのロマン主義文学の詩や小説で行われた先住民の理想化や熱帯の自然賛美は、社会心理学者で文学批評家でもあるダンテ・モレイラ・レイテ[3)]が主張したように、奴隷制下に置かれた黒人の問題をはじめとする、当時のブラジルの諸問題から目をそらさせるものであった。しかし、一方で、それらの作品が多様な民族的背景をもつブラジル人が共有できる神話を創出し、国民の一体感を醸成するために貢献したこともまた否定できない事実であると言えよう。

4. 言語学的側面

カルドゾ（Cardoso）によると、ブラジルでは、1500年にポルトガル艦隊によって「発見」された当初、1000以上の先住民族の言語が話されていたと推測されている[4)]。その後、新大陸にもたらされたポルトガル語は、様々な先住民族の言語と接触したとされているが、なかでも、ブラジルの北東部から南東部の沿岸にかけて最も広く使用されていたトゥピナンバ語（tupinambá）との接触は、植民地期におけるブラジルの言語状況や現在のブラジルポルトガル語を知る上できわめて重要である。

ブラジルで植民者の言語であるポルトガル語が主要言語となるまでには、ある一定の期間を要した。少なくとも18世紀まで最も広く使用されていた言語がリングア・ジェラル（língua geral）と呼ばれる共通語であったことは様々な文書で報告されている通りである。

リングア・ジェラルとは、上述したトゥピナンバ語がもとになって形成された共通語であるが、１つの言語というよりも、ポルトガル人と先住民との接触が起こった地域において形成されては消滅していった様々な共通語と認識されている。そのなかでも、リングア・ジェラル・パウリスタ（língua geral paulista）とリングア・ジェラル・アマゾニカ（língua geral amazônica）は、記録にも残されている重要な共通語である。前者は、現在のサンパ

ウロ州周辺に居住していた先住民、植民者のポルトガル系白人、および両者の混血の子孫を中心に拡大し、20世紀前半には消滅したとされているのに対して、後者は、アマゾンを中心に拡大し、1850年以降にはニェエンガトゥ語（nheengatu）と称され、現在でもアマゾナス州サン・ガブリエル・ダ・カショエイラ市（São Gabriel da Cachoeira）において、ポルトガル語、トゥカノ語（tucano）、バニワ語（baniwa）と並んで公用語の１つとして使用され続けている。

しかしながら、リングア・ジェラルを主要言語とするブラジルの状況は18世紀後半以降に一変する。その要因として挙げられるのは、おおむね以下の3点である。

① ポンバル侯爵の法令により、教育言語としてポルトガル語の使用がブラジルで義務付けられたこと[5)]
② 18世紀後半には、金をもとめてブラジルへ渡ったポルトガル移民が増加したことにくわえて、19世紀には新たなヨーロッパ系移民がブラジルへ渡ったこと[6)]
③ 1808年にポルトガル王室がリオデジャネイロに遷都したことにより、ブラジルに活版印刷術がもたらされ、国内で初めて新聞が刊行されたこと[7)]

これらにより、ブラジル国内で口語および文語ポルトガル語が普及する一方で、リングア・ジェラルは衰退への一途を辿ることとなるのである。

上述したような歴史的経緯から、リングア・ジェラルや、そのもととなったトゥピナンバ語が、現在のブラジルポルトガル語の形成に影響を与えたかどうかという議論がしばしば起こった。とりわけ、このような議論は、文献学者らを中心に展開された。しかしながら、実証研究に重きを置く近年の言語学者らによる現地調査の結果、音声面や形態統語面における先住民族の言語の影響はほぼ皆無であることが明らかとなり、現在では、ブラジルとポルトガルで使用されているポルトガル語の相違は、先住民諸語の影響ではなく、ポルトガル語内部で生じた変化によるものと認識されている。

その一方で、語彙面においては、トゥピナンバ語やリングア・ジェラルの影響は現在においても色濃く残っていることも事実である。このことからも、ブラジルポルトガル語の語彙は、俗ラテン語を起源とする語彙に、ブラジル独自の文化や社会を反映する語彙が加わり、より独創的で豊かな言語になっていると言えるであろう。

語彙借用については、「発見」当初から、ヨーロッパには存在していなかったブラジル固有の事物を命名する目的で、トゥピナンバ語やリングア・ジェラルを起源とする数多くの語がブラジルのポルトガル語に取り入れられた。その大半は名詞であり、とりわけ動植物相や料理に関するものがほとんどであった。パラナ州からリオデジャネイロ州にかけての沿岸部やサンパウロ州の内陸部では、Guanabara（グアナバラ）やIpiranga（イピランガ）

といったトゥピ語[8)]起源の地名も散見される。また、数は少ないものの、なかにはmirim（小さい）、jururu（落胆した）といった形容詞や、cutucar（小突く）、sapecar（殴る）といった動詞、andar/estar na pindaíba（一文無しの状態である）、estar de tocaia（見張っている）といった慣用表現も存在している。

このように、18世紀後半以降は、ポルトガル語がブラジルの主要言語としての地位を確立させてはいるものの、現代のブラジルポルトガル語を知る上で、植民地期におけるトゥピ語の影響を無視することはできない。以下にその一例を掲載する[9)]。

動物

(1) arara ＜ *a'rara* コンゴウインコ
(2) capivara ＜ *kapii'wara* (capim+comedor) カピバラ
(3) jacaré ＜ *yaka're* ワニ、アリゲーター
(4) jaguar ＜ *ya-'wara* (o que come gente) ジャガー
(5) piranha ＜ *pi'rãya* (peixe+dente) ピラニア
(6) pirarucu ＜ *piraru'ku* (peixe vermelho) ピラルク
(7) tatu ＜ *ta'tu* アルマジロ
(8) tucano ＜ *tu'kana* オオハシ
(9) urubu ＜ *uru'bu* クロハゲタカ

植物

(1) abacaxi ＜ *iwaka'ti* (fruta+cheirosa) パイナップル
(2) açaí ＜ *yasa'i* アサイ
(3) amendoim ＜ *mãdu'bí* ピーナッツ
(4) buriti ＜ *mburi'ti* ブリティヤシ
(5) caju ＜ *aka'yu* カシューアップル
(6) capim ＜ *kaa'pii* (mato fino) 草、牧草
(7) guaraná ＜ *wara'na* (fruto amarelo) ガラナ
(8) ipê ＜ *y'pê* (árvore cascuda) イペ
(9) jabuticaba ＜ *yapoti'kaba* (frutos em botão) キブドウ
(10) mandioca ＜ *mandi'og* (raiz da mandioca) キャッサバ
(11) maracujá ＜ *mboruku'ya* パッションフルーツ
(12) pitanga ＜ *pi'tanga* (vermelho) ピタンガ

その他

(1)　caatinga ＜ *kaa'tinga* (mato+branco)　（ブラジル北東部の）有棘低木
(2)　caipira ＜ *kaa'pora* (habitante do mato)　田舎者
(3)　carioca ＜ *kari'oka* (casa de branco)　リオデジャネイロ市の人
(4)　guri ＜ *gu'ri* (criança)　少年
(5)　pipoca ＜ *pi'poka* (pele estalada)　ポップコーン
(6)　tapioca ＜ *tipi'oka* (coágulo)　タピオカ

上記に紹介したトゥピ語起源の語は、ほんの一部に過ぎないが、その中には、「カピバラ」「ジャガー」「ピラニア」「アサイ」「ガラナ」など、日本語に借用されている語も見受けられ、トゥピ語とポルトガル語の接触が世界にもたらした社会文化的影響の大きさを実感できるであろう。

注

1）パウ・ブラジル。ブラジル海岸部原産のマメ科の高木で赤い染料の原料となった。
2）アイモレ民族については以下のオンライン百科事典とオンライン雑誌に掲載された記事を参照した。
“Aimoré” In *Britannica Escola*. <https://escola.britannica.com.br/artigo/aimoré/483039>（最終アクセス日 2021 年 10 月 7 日）
“A antropologia física dos ‘vis aimorés’” *Agência FAPESP*, 07 de junho de 2016. <https://agencia.fapesp.br/a-antropologia-fisica-dos-vis-aimores/23322/>（最終アクセス日　2021 年 10 月 7 日）
3）レイテの主張については拙稿（平田 2014：69-70）で詳述している。
4）(Cardoso 2010：156)
5）(Noll 2019：111-112)
6）(Dietrich & Noll 2019：84)
7）(Noll 2019：114)
8）「トゥピ語」という用語のもつ曖昧性については、すでに鳥居（2021）で論じた通りである。それゆえ、本章では、「トゥピ語」を称するのは、トゥピナンバ語とリングア・ジェラルを総称する場合か、いずれの言語か厳密に区別されていない場合に限るものとする。
9）トゥピ語の綴りについては、語源に関する情報が豊富に掲載されている以下のオンライン辞書の情報を参照した。
<https://www.infopedia.pt>（最終アクセス日　2021 年 11 月 8 日）
<https://michaelis.uol.com.br>（最終アクセス日　2021 年 11 月 8 日）

参考文献

（外国語文献）

Bosi, Alfredo
　　2017　*História concisa da literatura brasileira*. São Paulo, Cultrix.

Candido, Antonio

2006 *Literatura e Sociedade*. Rio de Janeiro, Ouro sobre Azul.

Cardoso, Valéria Faria

2010 “A língua guarani e o português no Brasil”, in Noll, Volker & Dietrich, Wolf (orgs.), *O português e o tupi no Brasil*, Contexto, São Paulo, pp.155-166.

Dias, Gonçalves

2002 *Poesia indianista: obra indianista completa: poesia e dicionário da língua tupi*. São Paulo, Martins Fontes.

Dietrich, Wolf

2010 “O tronco tupi e as suas famílias de línguas. Classificação e esboço tipológico”, in Noll, Volker & Dietrich, Wolf (orgs.), *O português e o tupi no Brasil*, Contexto, São Paulo, pp.9-25.

Dietrich, Wolf & Noll, Volker

2010 “O papel do tupi na formação do português brasileiro”, in Noll, Volker & Dietrich, Wolf (orgs.), *O português e o tupi no Brasil*, Contexto, São Paulo, 2010, pp.81-103.

Edelweiss, F.

1969 *Estudos Tupis e Tupis-Guaranis*, Livraria Brasiliana, Rio de Janeiro.

Leite, Dante Moreira

1979 *O amor romântico e outros temas*. São Paulo, Editora Nacional.

Lopez, Adriana & Mota, Carlos G.

2008 *História do Brasil. Uma Interpretação*, Editora SENAC, São Paulo.

Ribeiro, D.

2004 *O povo brasileiro: a formação e o sentido do Brasil*, Companhia das Letras, São Paulo.

Schrader-Kniffki, Martina

2010 “O nheengatu atual falado na Amazônia brasileira”, in Noll, Volker & Dietrich, Wolf (orgs.), *O português e o tupi no Brasil*, Contexto, São Paulo, pp.211-229.

（日本語文献）

鳥居玲奈

2021 「ブラジル植民地時代における言語接触―トゥピ語にまつわる用語の整理―」『ブラジル研究』第17、1-12。

平田惠津子

2014 「文学に見るブラジルの姿－ロマン主義の場合（１）」『ブラジル研究』第10号、61-72。